05

夕星（ゆうせい）のプラモデルを中核に再構成された〈エクステンド〉には傷一つない。金属的な鈍い輝きを放つ全身の装甲は、それが砂塵で出来ていると思えない程であった。

ただ一つ、先程まで怪獣と戦っていた〈エクステンド〉と今の〈エクステンド〉の差異を上げるのならば、額に印字されたナンバーが「００」から「０１」に変わっていることだ。

「嘘だろ……〈エクステンド〉が蘇ったのか……」

十悟（じゅうご）はその光景に、理解が追いつかないという顔で絶句する。

理解が追いついていないのは夕星も同様であった。ただ、それと同時に妙な納得感もあった。まるで、こうなることが予め決められた確定事項のような気がしてならないのだ。

それどころか、殆ど直観的にとある考えに辿り着く。――――「今の自分になら、このマシーンを操れるのではないか？」と

そんな考えと同時だった。〈エクステンド〉の巨体が跪き、その剛腕を夕星へと差し出した。金属の噛み合う音と共に、カメラアイやセンサー類を保護しているであろう装甲が展開。まるで大きく口を開けるようにして、その内側が露わとした。

「まさか、お前……」

そこにあるのは、ちょうど人が一人収まりそうなシートと、一対の操縦桿らしきモジュールが備えられている。

空の操縦席を露出した〈エクステンド〉はただ鎮座して、己が乗り手をただ待ち侘びる。

「……俺に『乗れ』って言いたいのか？」

上等だ。

夕星は奇跡や神様なんてものを信じるタチじゃない。なんなら少し斜に構えて「そんなの信じねーぜ」と笑い飛ばすタイプだ。

ただ、今は奇跡だろうと何だろうと構いやしない。「力が欲しい」と願い、その結果与えられた力が〈エクステンド〉だというのなら、躊躇う理由もなかった。

「待つんだ、夕星！！」

差し出された　掌（マニピュレーター）　へと飛び乗ろうとする夕星の腕を、十悟が掴む。

「まさかとは思って聞くが、夕星……君は、コイツに乗ろうって気じゃないよな？」

「そのまさかだ。俺は〈エクステンド〉であの得体の知れねぇ怪獣をぶっ倒して、ヒバチを助ける」

「いや、何言ってんだよ……〈エクステンド〉はさっき、あの怪獣に負けたばっかじゃない

か！　それに陽真里（ひまり）ちゃんだって馬鹿じゃない。仮に学校に残っていたとしても、あの怪獣が迫って来るのを知れば、すぐに避難するはずだろ！」

例え、困惑の中にあろうとも、十悟の主張は最後まで正論であった。

夕星の周りの「頭のいい奴」は揃いも揃って、正論が上手い。それはきっと自分以上に周りが見えているからであろう。

だが、今回ばかりは夕星も譲る気がなかった。

陽真里を狙う、あの怪獣はこれまでの怪獣と何もかもが違っているのだ。

もしも、彼女がシェルターに隠れたとして。あの怪獣がシェルターごと彼女を潰せる術を持っていたらどうなる？

もしも、何らかの要因で彼女が逃げ遅れていたらどうなる？　きっとあの怪獣は避けた口元をニンマリと歪め、嗤うのだろう。

「悪いな十悟。俺はヒバチが……いや、陽真里が傷付く可能性があるのなら、例えそれが１パーセントにも満たない確率であろうとも、それを許すことができないんだ」

「なんだよ、それ……。確かに俺だって陽真里ちゃんのことは心配だ。幼馴染である君が、彼女に対して特別な感情を持ってることだって知っている。ただ、さっきから聞いてれば、陽真里ちゃん、陽真里ちゃんって……少し熱くなり過ぎだ！」

十悟の瞳がキツく眇められた。

けれど、その瞳に込められた思いは、敵意や苛立ちではなく、自分へと向けられた不安と心配であった。

彼は此方の襟首を掴み上げ、強く揺する。まるでどこかおかしくなってしまった自分を正気へと戻そうとしているようでもある。

だが、夕星はその腕を払い除けた。

「悪い、十悟。俺にとって陽真里はただの幼馴染じゃねぇんだ。――――増して、『好き』とか『嫌い』とか、そんなチープな言葉で表せるほど、俺の内心は安くねぇんだよ」

◇◇◇

中学に上がって間もない頃、夕星の父親が蒸発した。職場で女を作り、そのまま相手共々、行方が掴めなくなったのだ。

あの男は子供だった夕星から見ても、世渡りが上手い方であった。様々な人間関係を構築し、それを効率よく利用する手腕は、半ば詐欺師じみていたとも思う。

そんな男なのだから、今も呑気に日常を過ごしているはずだ。或いはその女と幸せな家系でも築いて、自分のことなんかとっくの昔に忘れているのではないだろうか？

それからまた暫くして。今度は次第に頭がおかしくなりつつあった母親が遂に首を括った。

机上に「ごめんね、夕星」とメモを残してだ。

正直、何がごめんだと思ってしまった。

謝るくらいなら、もっと別な選択があったのではないかと、親を失った悲しみよりも、苛立ちが上回った程だ。

幸いにも母方の両親が夕星を引き取ってくれたから、経済的にも生活的にも困ることは少なかった。それでも、多感な時期にそんな経験をしたのだから、夕星の中学時代はひどく荒れ果てた。

手当たり次第に、詰まらないことをしている連中を殴り倒して、憂さ晴らしに勤めていた。いかにもガラの悪そうな高校生や、地元の愚連隊と正面を切って喧嘩をしたのだって一度や二度じゃない。

当然、そんな日々を送っていれば絆創膏や生傷と共に、自分へ向けられる冷ややかな視線と偏見ばかりが増えていく。いや……あれは偏見などではなく、他者の認識する「神室夕星」という人物像そのものであったのであろう。

腹を割って話せる友人も、十悟くらいのもので。他の悪友も媚へずらってくる金魚のフンばかりであった。

けれど、当時の自分はそれで良かったのだ。いっそ一人になれたなら、どれだけしがらみがなくなるだろうかと、心地の良いメランコリーに酔ってさえいた。

だが、彼女だけは――藤森陽真里（ふじもり）だけは、自分にしつこく付き纏うことを止めようとしなかった。

例え何度拒絶しようとも、「幼馴染だから！」という理由だけで、彼女は救急箱を片手に傷の手当てをしてくれたのだ。

ロクに授業に出ようとしなかった自分に、勉強を教えてくれもした。未来や進路について諭されたのだって、一度や二度ではない。

「夕星はもう少し、他愛もないような日常を好きになった方が良いよ」と。

「世界はフィクションとノンフィクションに溢れてるんだから。辛いなら、存分にフィクションに逃げて良い。子供みたいに幼稚な願い事や幻想を抱いたって、目の前のノンフィクションに押しつぶされるよりはマシなんだから」と。

そんな風なお説教を、何度も食らったことを覚えている。

そして、また少しずつ時間が過ぎっていって。中学を卒業するくらいの頃には、喧嘩の傷が顔から綺麗に消えていた。

どこで道を間違えたのか、オタク趣味に目覚め、お金の使い道について叱られることも増えたが、それで良かったと思う。

少なくとも今の自分は中学の頃の自分とは違う。

彼女の言う通り、他愛もない、何処にでもあるような日常を心の底から楽しむことができたのだから。

◇◇◇

「きっと俺は陽真里がいなくちゃ、親父以上のろくでなしか、お袋以上の無責任な大人になってたと思うんだ。だから、寸でのところで俺を引き止めてくれたアイツには、返しきれないくらいの恩があるんだ」

だから、彼女を助ける。

「泥沼の底にいた自分を彼女が救ってくれたように、今度は自分が彼女を救わなければならない」と言う、ただそれだけのシンプルな理由が、夕星の手足を動かす原動力となり得た。

トルクを上げるエンジンのように火照ってゆく気持ちも、鋼のように固い覚悟もすべては彼女がいるからだ。

「そうかい……陽真里ちゃんが君に求めている想いは、そんな呪縛みたいな恩義じゃなくて、もっと単純明快なものだと思うけどね」

夕星には、そこに込められた真意を読み解くことが出来なかった。

ただ、十悟もこれ以上、自分を止めようとしない。その代わり、握った拳を差し出して、

「分かった、君の好きにすれば良いさ。〈エクステンド〉に乗って、あの怪獣を殴り倒すのも、陽真里ちゃんを助けるのも、好きにすれば良い。――ただ、一つ条件を付けさせてくれ」

「条件？」

「ちゃんと、勝って戻ってくるんだ。そうしたら、また放課後ゲーセンで遊ぼう。格ゲーの決着ついてないだろ？」

そういえば、お互い一ラウンドを取ったまま決着がついていなかった。

それを言うのは今じゃないだろうに、本当にこの悪友は……

「十伍、お前な……」

ただ、おかげで張り詰めていた気持ちも解れた。

「あぁ、分かってる。俺の操る〈エクステンド〉が怪獣なんかに負けるわけがねーだろ！」

夕星も同じようにして拳を差し出す。

そこで交わしたフィスト・バンプからは、小気味の良い音が鳴った。

◇◇◇

ゆっくりと装甲が降りてきて、夕星を収めたコックピットは静かに閉ざされる。

ほんの一瞬視界が暗闇に包まれるも、すぐにシート背部から顔の半分を覆うようなヘッドセットが現れ、額へと装着された。

これを介して、外の光景を窺い知るのであろう。

「ロボットものでよくある網膜投影とか、視神経のリンクみたいな奴なんだろうな」

夕星の視界に映し出されるのは、外の景色だけじゃない。機体の電圧や油圧など、様々な数

値を示すパラメータが投影された。
複雑な数値の羅列ばかりが視界を埋め尽くしていく。
だが、夕星には何故かその意味が理解できるのだ。
操縦桿をどのように倒して、足元の踏板をどう蹴れば、機体がどのような挙動をするかまで理解できる。
それどころか、すこし懐かしい感じまで……
「電圧チェック。油圧チェック。」
コックピットに備えられたスイッチを一つ、また一つと入れていく。
その動作に一切の逡巡はない。

「エンジン回転数・正常（ノーマル）。関節機構ロック解除。ＯＳ（オペレーティングシステム）アクティベート・スタンバイ。
――さぁ、いこうぜ〈エクステンド〉ッ！」

06